

山梨eライブラリー

P.S.
がんでした

SAMPLE

新聞記者の闘病記

山梨日日新聞社

目次

SAMPLE

プロローグ「生存曲線」が示す意味

〈1〉	5年生存率80%	5
〈2〉	告知：混乱する気持ち	7
〈3〉	父の意外な言葉	12
〈4〉	外来治療の日々	17
〈5〉	インフォームドコンセント	21
〈6〉	二人の医師	25
〈7〉	中元に添えて病気を報告	29
〈8〉	副作用：白い枕に髪	34
〈9〉	母と二人の姉と祖母	38
〈10〉	自家移植：新たな“自分”	42
〈11〉	社会保障の支え身に染みる	47
〈12〉	院内でアロマ足湯	51
〈13〉	外泊は“小旅行”	55
		60

〈14〉	院内「カフェテリア」の楽しみ	64
〈15〉	針の痛みに向き合う	69
〈16〉	言葉の力で奮い立つ	73
〈17〉	生きる意味を自問する	77
〈18〉	ピアサポートが心の支えに	83
〈19〉	精子の凍結保存	87
〈20〉	被災地の朝日の中で命を思う	91
〈21〉	自分の中に生まれた変化	95
〈22〉	読者からの声	98
	連載を終えて	102

SAMPLE

プロローグ「生存曲線」が示す意味

生存曲線と呼ばれるそのグラフは生存率を示している。自分に当てはまるのは上から3番目の線で「5年生存率80%」。主治医はこう教えてくれた。命の確率を示す黒く、細い1本の線から目が離せなかった。

2009年秋、26歳の時、血液のがんの一種「ホジキンリンパ腫」と診断された。入社3年目の宣告。親しい友人にはお中元の箱に「P.S. がんでした」とメモを残して伝えた。「がん」という言葉の重みを中和したいという思いがあった。そして経験した入院、復帰、再発、再入院、復帰……。現実と向き合い、時に目を背けながら過ごした3年の日々と今を伝えたい。〈山梨日日新聞社文化・くらし報道部記者 橘田俊也〉

〈1〉 5年生存率 80%

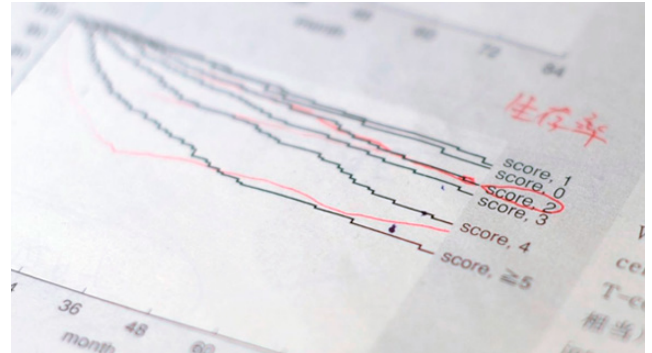
「あしたの降水確率は20%」。こんな天気予報のときは傘を持っていくかどうか迷う。持っていない人もいれば、念のために、と思う人もいるだろう。雨は降るかもしれないし、降らないかもしれない。5年後の自分も同じ。いるかもしれないし、いないかもしれない。誰にも確証はない。

◇

「5年生存率は80%です」

2009年10月、山梨大医学部付属病院の外来棟の奥にある入院病棟2階の一室。約1カ月間の入院生活を経てあすは退院という日、私は主治医からこう告げられた。

テーブルを挟んで椅子に腰掛けた医師が、予後（今後の病状の医学的な見通し）について、生存曲線と呼ばれるグラフがかかれた資料を示し、説明してくれた。グラフは縦軸が生存率、横軸が月日の経過を表している。6本の線の中から、年齢や性別、病気の進み具合によって該当するものが決まる。男性であること、



「生存曲線」が記されたグラフ

SAMPLE

血清アルブミンが基準値より低いことで、自分に当てはまるのは上から3番目の線だった。なだらかな右肩下がりの、自分の命の確率を予測した1本の黒い線から目が離せなかった。

期限の宣告はなし

5年後に生きている確率は80%。ひどく落ち込みもせず、かといって喜ぶこともできない数字だった。「あくまで統計的なものですから」。その後聞かされた医師の言葉はあまり耳に入らなかった。

病院の薄暗い廊下を歩いて、カーテンで仕切られた4人部屋の窓側にあるベッドに1人戻った。「死んでるかも…」なんて一度も考えたことがなかった5年後。そこまで思いをめぐらせようとしたが、想像の途中で自分がいなくなっていることを考えてしまいそうで、やめた。

「余命数カ月」といった命の期限の宣告はなかった。だが、26歳にしてこの数字は結構インパクトがあつた。裏を返せば、2割の確率で5年後の自分はあの世で暮らしているということになる。間近の30歳代や、じいさんになった自分はいないかもしれない。この数字をどう受け入れればいいのか戸惑った。

SAMPLE

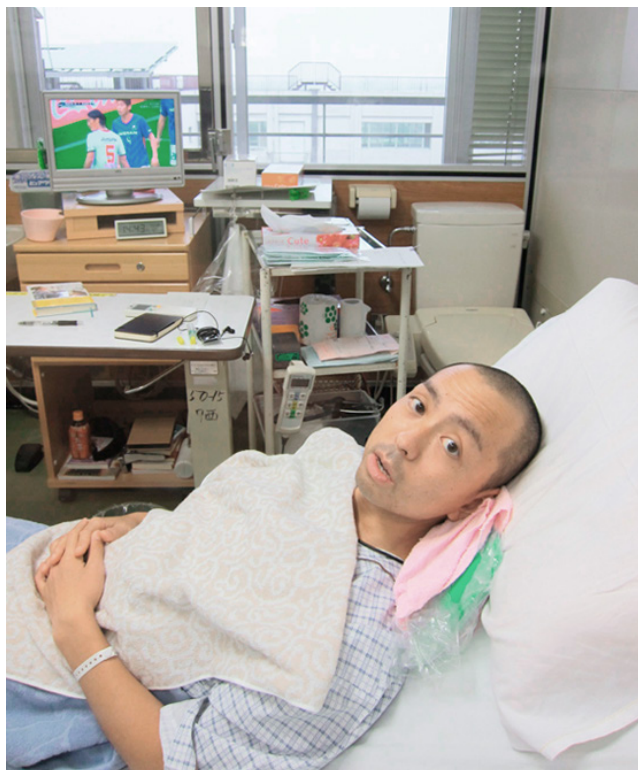
心をコントロール

「5年生存率80%」を告げられてから2年半余り。ポジティブにとらえようと試みたこともある。20%は死んでいるかもしれないという低い確率の将来を抱えながら、今やきょう、あしたという目の前で待っている時間をより大切に感じながら生きていく。そんな風に考えられたら素晴らしいと思う。でも、今の自分にはそうできそうにない。

言えるのは、命について考えるのは本当に大変な作業なのだということ。病氣と向き合うのも、体力以前に氣力や心をどうコントロールするかが何よりも難しいと、闘病中に知った。

生存率を聞かされた後に約7カ月間、通院しながら治療に専念した。がんの病変が見えなくなり症状が安定した「寛解」状態で、復帰。しかし再発の疑いが強く、また職場を離れ、より強い化学療法を重ねた。生存率はもつと低くなっているかもしれない。

会社に戻った今は月に1度の定期検診以外、病院に足を運ぶことはほとんどない。取材、原稿に追われる毎日。それでも少し気が緩むと、命に関わるやつかい



SAMPLE

再発して入院治療中の筆者＝山梨大医学部付属病院（2011年11月）

で切っても切り離せない、えたいの知れない不安が頭をもたげる。ただ、それでいいとも思っている。自分に「おまえはそんなもんだよ」と言い聞かせながら、生きている。

▼ホジキンリンパ腫 白血球の中のリンパ球が悪性化した悪性リンパ腫の一種で、血液のがん。抗がん剤や放射線を使って治療する。悪性リンパ腫にはホジキンリンパ腫のほかに、非ホジキンリンパ腫がある。国立がん研究センターがん対策情報センターによると、悪性リンパ腫は日本で年間10万人当たり7〜8人に発生し、そのうちホジキンリンパ腫は約10%。